
すみっこのわたし

水月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

すみっこのわたし

【Nコード】

N1692Z

【作者名】

水月

【あらすじ】

身分差のある夫と私。政略結婚でも結ばれてうれしかったのに・
・。実際の結婚生活には、つらい現実が待っていた。私は今日もこのすみっこに生きている。

1 私のこと

美しい金髪の束ねた髪、そして青い瞳。どこから見ても、誰が見ても美しい夫。私は冴えない元成金・没落一族の女。なぜ、こんな人が私と一緒にいるのか？それは私と彼が政略結婚しているからだ。夫は結婚前から、こんな美しい容姿であるため様々な浮名を流していたようであった。加えて、頭脳明晰で家柄も代々学者や医師を輩出している優秀な一族である。これでは女がほっとくはずがない。当初は私も、その容姿端麗な外見、そしてその付随するもの、そしてなにより気品のある紳士的な態度にすっかりだまされてしまったものだ。

しかし、いったん結婚してしまうと彼の態度は豹変した。私はもともと冴えない上、容姿もいまいち、頭もそれほど・・・といった人間であった。いや、外見に関してはいまいちどころか、夫から言わせれば今まで知り合った女の中でも、下の中くらいだとのことだ。彼は、私をなじることが日常茶飯事となった。暴力まではないが、言動は冷ややかになっていった。また、浮気や女遊びも公然と行うようになり、パーティーなど夫婦同伴の集会には、愛人を伴っていることも多い。彼曰く、私を、人様に妻であると紹介するのは、恥ずかしくて出来ないのだという。私は「じゃあなぜ私を選んだの？」といったもの疑問を心の中でつぶやくのであった。しかし、答えはわかりきっている。没落した我が一族が彼の一族に身売りをし、取り入って私を好きなようにしてください、とさしだしたからだ。私の運命は決まっているも同然だった。

婚約したての頃は、そこまでわからなかった。ただ、彼の表面だけのものに振り回され、のぼせ上がっていたのだから・・・。

そう、これは政略結婚なんだから、あきらめるしかないのだ、と唇をかんで私はいつも我慢する。「お前みたいな女の出来損ないが、俺と結婚できたことだけでもありがたすぎるくらいなんだ。」と彼

はよく私に言った。

・・・その通りだ。このままいけば売れ残りは必須だったはずなのだから。そして、生活も今のようにならなくなったものでなく、明日食べるものを確保するのも難しい状況になっていたに違いない。

しかし、私はお飾りの妻どころか、女中か下働きのようなものであった。炊事・洗濯など、彼は彼の実家のようにメイド・執事をおかず、すべて私にさせた。私を信用しないのか、家計管理は彼が行っていた。また彼は、絶対に私には触れようとはしなかった。結婚初夜、彼は私を、まるで汚らしいものを見るように「あっちへいけ。お前の部屋は向こうだ。」と冷やかな視線と言葉をあげせ、私は彼の部屋から追い出されてしまった。私は呆然としてしまったが、すぐすごと向かいの南角部屋に引っ込んだ。悲しくて、悔しくて、私はそのとき政略結婚をした彼の、本性を見たのだった。

2 夫のこと

私の夫はアルベール・クレイトンという。クレイトン家といえば、私たちの住むエダル地方では知らぬ人がいないほど名家である。多くの学者を生み、彼らは非常に優秀であった。私の義父である、クレイトン家の現当主も、王家から侯爵の地位をいただいており、彼自身は優秀な宮廷医師であった。また義母は、クレイトン家と並ぶ2大貴族・ゼフリール家の令嬢である。義父には3人の息子がおり、その次男にあたるのが、アルベールだ。

アルベールは、他2人の兄弟より優秀であり、次期当主と目されていた。しかし彼自身は面倒ごとを避けており、宮廷医師になったにも関わらずその地位を辞してしまった。しかし、能力の高い彼は王宮からその才能を惜しまれ、貴族・王族対象の選任教育者として、宮廷にひきとめられた。一方で彼は顔も広く社交的であったため、趣味・道楽と称しその人脈を生かして貿易や経営なども行っていた。彼はそちらでも、才能を発揮していた。

見た目は義母一族譲りの美しい容姿を持ち、能力は優秀な義父の血を受け継いでいるアルベールである。幼い頃からそれなりに人にもてはやされ、彼自身も自分の立ち位置や魅力をわかっていたのだろう。彼は非常に冷静で、冷酷な部分があったと思う。自分に益にならない人物は、それなりに排除してきていたし近づこうともしなかった。また、女遊びも非常に激しかった。出入りしている宮廷・貴族・果ては王族まで、彼に熱を上げる女性はいくつもあった。後から知った話だが、彼は王家の遠縁に当たる姫と婚約も勧められていたという。しかし、なぜか彼はそれを断り続けていたそう。そう、彼には想い人がいたのである。

この話は、あくまでも結婚前に流れていた噂にすぎないのだが、私はなぜかそれが本当のことであると確信していた。

噂の内容は、アルベールが学生時代、ある中流貴族の妻に熱を上

げていて、二人は想いを遂げてしまったこと、そして彼女が夫の知らぬ間にアルベールとの子供を身ごもってしまった上に、流産で亡くなってしまったこと、しかもいまだアルベール自身はその婦人を忘れられず、彼女の面影を色濃く残す娘に執着していること、であった。

もし私が彼と結婚せず、今のような状態にならなければ、この噂が根も葉もないものだと思っていたのだろうと思う。しかし、今のつらい現実を目の当たりにすると、その噂も本当のように思えてしまふのだ。だが、ある出来事でその話が事実であるということがわかってしまう……。

3 夫婦の会話のこと

夫が夜分遅く帰宅した。私は自室のすみにあるソファで本を読んで、夫の帰宅を待っていた。いくら冷たい夫でも夫には変わりなく妻として迎えるのが私の習慣になっていたからだ。夫はいつものように玄関先に出てきた私を一瞥し、通りすぎようとした。が、今夜はめずらしいことに途中で立ち止まり、肩越しに私を見てこう告げた。

「おい、明後日宮廷で夜会が開かれる。お前も来るんだ。いいな。」

結婚してからはじめての夜会だ。でも、なぜ私を連れて行く気になったのだろうか？怪訝な表情をしていた私に彼は、「王と王妃が、お前を見たいそうだ。いいか、余計なことはするな。俺の面目はつぶしてくれるなよ。」と言って、今度こそ本当に自室へ入っていた。

夜会はほとんど出席したことはない。私は、成金で貴族世界に無理矢理入ったあるまじき下品な一族の人間として評されていた。もちろん両親でもある。伝統ある、保守的貴族社会には受け入れてもらえなかったのだ。だから、公の集会に招待もされなければ、それでも一種の陰湿な娯楽の対象にすぎず、苦痛な時間だけが流れていた。また、父が事業に失敗してからは没落した貴族として蔑まれていたため、余計に華やかな世界とは縁がなくなった。家計は火の車で、成金上がりの両親は金の工面に必死であり、残った私も生計のたしにと、こっそり町へ働きにいたり、賃金が払えずメイドも執事も解雇していたため家事を切り盛りしたりしていた。

王家の人々が私を見たいのは、気まぐれと興味本位に過ぎず、友好的な感じは一切ないのだろうと思う。実は私とアルベールは結婚

しているが、結婚式は挙げていない。この国の法律で定められている、結婚証書を役所に提出し、その後王家の民事担当官に報告をする、という形式的な手続きしかしていないのだ。たぶん、普段から他人に妻である私のことを知られたくないアルベールは、王と王妃に直接それを報告したのだろう。彼は王や王妃に謁見できるほどの地位にあり、それだけ近いはずだから。まあ、彼は宮廷でも有名なだし、それはなんら不思議はない。彼の報告で、王と王妃は彼の伴侶を知りたくなっただけであろう。

そこまで考えて、私ははっとした。夜会に着ていく服がないのだ。私の家のものは、ほとんどが競売にかけられ、売れるものはほとんどを売りにだしていた。ドレス類もその一つである。私は夫の元に嫁いでくるとき、普段着と外出するときの上質であるが、型が古く地味なドレスを数着しか持ってきていなかった（というか、もってこれなかったのだが）。王家の夜会にふさわしい、豪華なドレスなど一着もない。私は途方に暮れて思案した。夫にドレスを買ってくださいなどとは、口が裂けても言えない。彼に言ったところで、渋い顔をして辛辣な事を言われて終わりであろう。彼は、私が話しかけようとする和不機嫌になるからだ。彼の機嫌を損ねるのは得策ではない。私は溜息をついた。仕方ない、外出用のドレスの中でも、なるべく新しそうなものを着ていくしかなさそうだった。

間幕 妻のこと

あの女は、いつも角部屋にいる。正確には俺があれを追いやった、というべきなのだろうが。

あれは結婚前から冴えない女だった。舞踏会でも、集会でも。壁の花どころか存在感さえ薄い。ついでに言うところ、特徴はなく、とりたてて頭脳明晰でもなく、むしろ外見は平凡以下であると思う。それなのに政略結婚といえども、なぜ、よりによってあの女なのか。俺には王族ゆかりの姫から、貴族の令嬢などよりどりみどりだったのに。

「アル、もう。ぼんやりしてどうしたの？」

情事後、ベッドの上で煙草を吸いつつ、とりとめもなく考えることをしていた。すると、情事の相手である女が、裸の胸を押し付けるようにすりよってきた。仕事先の仮面舞踏会に出席したときにまたま一曲相手しただけだが、彼女から迫ってきて始まった関係。彼女とはある貴族の令嬢であった。俺はビジネスと体だけなら、と条件をつけて一夜を共にした。それからというもの、ほぼ毎週末、王宮の仕事を終えてから、彼女が馬車で迎えに来ることが多くなった。彼女をうまく利用し、多額の金を俺の会社に投資させている俺としては、いい金づるである。金儲けでき、彼女の豊満な肉体も楽しむことが出来る。彼女は令嬢らしくしとやかで、美しい肢体を持ち、さらに処女だった。俺がここまで教え込んだようなものだ。しかし、同時に彼女は世間知らずの娘でもあった。俺にのぼせ上がっているのだ。だから、うまいことをいえばすぐになびいてきた。

「なんでもない。」

俺は煙草を灰皿に押し付け、彼女をだしぬけにベッドへ組み敷いた。「あつ・・・またなの？もう・・・。」

しかし、どんなに彼女や他の女を抱いていてもぬぐいきれない、あ

の光景。脳裏に浮かぶのは、埃っぽいあの角部屋の、セピア色の光景。そして――――。

俺はその不可解な気持ちを振り切るために、彼女を明け方まで何度も抱いた。

4 夜会前日のこと

夜会前日の午後、私は町へ買い物に出かけた。今日の夕食の材料を買おうといつもの食材店へよった帰り道、私はふと立ち止まった。服飾店の窓越しに、レースの美しいドレスが飾ってある。女性なら一度は着てみたい、と思わせる上質な布地に、清楚なスタイルのドレスであった。

しばらくドレスに見入っていたが、ふとわれに返り、窓に映る自分の顔を見つめた。どこにでもある平凡な顔、ブラウンの瞳に髪、貧弱な身体。そして同時に夫の言葉も思い出す。

『女のできそこない』

夫が言いたいことはわかる。容姿だけでなく、とくに雰囲気、内面的なものも揶揄しているのであらう。私は人見知りで、辛気臭いと男性から言われることも多くあった。だから、なるべく社交的でいようと、明るくなろうと努力した。しかし、かえってその反動で周りを気にするあまり、臆病さに拍車がかかったのも事実である。

私は溜息をついた。だめだ、どちらにしろ私には似合わない。それから金銭的にも余裕はない。そのドレスをはじめ、ショーウィンドーの商品はみな素敵だったが、自分の懐でまかなえる金額ではなかった。名残惜しかったが、しかたなくその場を離れ家路へと急いだ。

家につくと、食材入りのバスケットをテーブルにおいた。外は乾燥していたため、喉がかわいたので、茶の準備をする。湯を沸かす間、しばらく戸棚の整理をしていると、玄関のベルが鳴った。誰だろうと、ドアをあけると、配達員が大きめの箱を抱えて立っている。「おとだけものです。サインを。」

伝票にサインすると、私は箱を受け取った。表面の送り主を見ると、私の実家からだ。箱をあけると、薄いブルーのイブニングドレスがはいっているではないか……。添えられた手紙をよむと、母の字でこう書かれていた。

『愛する娘へ』

元気でやっていますか？あなたがそちらへいつてから、もう何年もたったような気がして寂しく思います。体には気をつけるのよ。それから、今度王宮夜会があると思いますが、私たちにも招待状が届きました。もちろん、あなたとアルベール殿も招待されていると思います。出席するのでしょうか？でも、着ていくドレスがないだろうと思って、これを贈ります。私たちはいつでも、あなたのことをおもっていますよ。』

わたしはその手紙を読んで、ちよつと涙ぐんだ。今回父母は不参加だとも書かれていたが、どうやら両親のところへも、王族から夜会への招待状が届いたらしい。多分、興味対象の一族の顔もみたいと思ったからだろう。父母は、夫が王宮で仕事をしているのを知っている為、当然、妻の私も夜会に招待され、出席するだろうと考えたようだ。そして、着ていくドレスに困っているのにも思い至ったらしい。私がいまだドレスを多くは持参していないことや、夫との仲をうすうすは知っているのもあつて贈ってくれたに違いない。私は両親に心配をかけたくないため、何も言わないようにしているのだが……。

父母の好意をありがたく思いつつ、ドレスを広げた。薄いブルーの、派手さはないが品のいい型でドレープがさらさらと波打っており、夜会にも着ていけそうなドレスだった。着てみると、サイズもぴったり合っている。しばらく姿見をみつめていたが、私はふと心配になった。このドレス、かなりいい値段なのは……両親もお

金がないのを知っているのに、家のことが心配になる。そして、その夜すぐ両親へのお礼と、近況報告の手紙をしたためたのだった。

5 夜会に行く準備と片道のこと

夜会当日になった。私は朝早起きして、家事を済ませ、買い物を終えて家路についた。すでに午後3時を回っている。午後6時には夫が馬車を手配しているの、それまでに準備をしておかなくてはならない。だんだん気が重くなってきた。私はもとと人ごみは苦手だし、過去の嫌な出来事や人の好意的でない視線を思い出すと萎縮してしまいがちである。しかし今はもうアルベールの妻であり、クレイトン家に嫁いだ身。妻としての勤めをはたさなくてはならないのだ。溜息をついて、ドレスに着替え化粧を始めた。他の女性なら、髪結いや化粧をする専属メイドがいるのだが私にはいないため、それなりに見られるように化粧をした。薄くおしろいを塗り、頬紅を薄くつける。薄い色の紅を唇にさし、柑橘系の香りがする香水を首筋に少量つけた。髪は結い上げ方が難しい、流行の髪型はもちろん私の技術では不可能なため、一つにまとめた髪を、青い小さいコサージュと真珠つきの髪留めで留めた。

この髪留めは、結婚前まだアルベールとであつたばかりの頃に、彼から旅行の土産と称してもらったものだ。私はうれしくて、こわれてしまったりしないように、彼と会うとき以外は大切に宝石箱に入れて保管していた。土産物でも、愛する彼からの初めての贈り物である。どんなものでも私にとっては大切だ。しかし彼は結婚後まもなく、私がこれをつけているのを見ると怪訝な顔をして「なんだ、それは？道化かなにかになったつもりか？」と言い放った。私が「あなたからもらったのですが・・・。」という、彼は顔をしかめて「ああ、あの安物か・・・。忘れていたがな・・・。それはもう付けるな。似合わん。」と鼻を鳴らして部屋を出て行ったのだった。私はショックで自分の角部屋に閉じ籠り、泣いた。捨ててしまえばいいのに、私も未練がましく今の今まで捨てられずにきているのだ。

似合わないのはわかつている。分不相応とも言いたいのだろうが、どうしても私は彼とのつながりを自分から断つようなことはできなかった。

だが今回は、それとは別に見栄えのするアクセサリー類を私が持つていず、それだけが唯一もっている髪留めだったから付けたにすぎなかった。いつもは黒いゴムでたばねるか、そのままストレートにしておくかであったから。深い意味はないと思う。だが・・・もしかししたら結婚後初めて一緒に出かけるから、思い出の品をつけていきたいという感傷もあつたかもしれない。

なんとか準備を終えて靴をはくと、角部屋の扉をノックする音が聞こえた。私はあわてて扉を開けるとアルベールが無表情で立っていた。彼は一度宮廷からもどつてきており、彼も着替えていた。タキシードを着こなし、金髪はゆるく黒いリボンで束ねている。美しい彼のタキシード姿はとても様になっており、女性の目をひきつけてやまないであろう。

「すみません。お待たせして。」

「・・・行くぞ。」

彼は私の姿を一瞥しただけで、なにも言わなかった。彼にしてはめずらしい。いつもは嫌味の一つも言われると思ったのだが・・・。屋敷の外にでると、馬車が迎えにきていた。彼はさっさと馬車に乗り込んでしまう。私は普段着慣れないドレスのため、馬車の高い階段を登るのに時間がかかってしまった。その時、強い力で体を引っ張られる。アルベールが業を煮やして私を引っ張りあげたのだ。私はちよつと意外だった。彼は私に関しては、冷たい言動が多い。普段は今のようないことがあつても、不機嫌な顔をし嫌味を言うか、舌打ちするかであり私には触れないからである。今日はどうしたのだろうか？彼らしくない。

「ありがとうございます。」

と私がいつて彼の向かいに座ると、馬車が動きだした。彼は黙った

ままだった。

馬車の景色は窓越しに次々と流れていく。夫は馬車に乗っている間中、窓に目を向けていた。一言も発しない。私も窓の外に目をやった。馬車の動く音が聞こえるだけで、馬車のなかには城につくまですっと静かなものであった。やがて森を抜け、街道を通り過ぎ城門が見えてきた。

馬車が城門内に入り城内への入り口につくと、彼は一人でまたさつさと下車してしまった。私は彼の性格をわかっていたので、転ばないようゆっくり降りようとした。そのとき、腰を抱かれ気がついたときには地に足がついていた。私は目を丸くして夫を見た。彼は無表情で私を馬車からおろすと、私を待つことなく、城内へと足を向けた。

6 王の間のこと

王宮はかぐわしい色とりどりの花に囲まれた、それは美しい城であつた。外壁は白く、壮麗である。また、吹き抜けの回廊を抜けるドーム型の広いホールへつくのだが、その天井には高名な画家により、美しい天使や神の壁画が描かれていた。その奥、さらに回廊を進むと王の間がありそこにはクリスタル製の彫刻が置かれ、金銀宝石で彩られた玉座があつた。私は王宮に入るのは初めてだったので、全てがもの珍しく、目を奪われていた。田舎者のようにきよろきよろしてしまい、夫にはにらまれていたが。でも、私は今だけは彼の視線を無視した。今度は来られるかどうかすらわからない。だからこの素晴らしい城をよく見ておきたかつたのだ。ホールを抜け、回廊を歩く。しかし、周りに人はまばらであつた。そういえば、城門を抜けても人があまりいなかった。そう、彼は夜会開始より遙かに前にここへ着くようにしていたのだ。私ははじめ、彼の意図がわからなかつた。しかしついた王の間で、王と王妃がいるのをみて納得した。彼は夜会で人目につく前に、王と王妃に私を会わせたかつたのである。私は夫に連れられ、二人の前に立つた。

「お初にお目にかかります。本日は、お招きいただきありがとうございます。ございました。私はアルベールの妻のオリエ・クレイトンと申します。」

と丁寧な膝を折り、お辞儀をした。すると王は、顔を上げよ、と命じた。王は銀髪に、しわのきざまれたいかめしい顔つきで私を見ていた。脇で王妃も笑顔で私を見つめている。王妃も銀髪であつたが、顔はまだ若々しく、はつらつとしていた。王妃が夫をみて言った。

「アルベールほどの人が、どんな美女と結婚したのかしら？と思つていただけ……ちよつと意外だでしたわね。」

王は黙ったまま、私を値踏みするように見ていた。そして夫に言った。

「お前ほどの男なら、もっと良い女もいただろうに。だから言っただではないか。分家のマルグレット姫との婚姻を進めよとな。」

夫は黙って聞いていたが、やがて口を開いた。

「あの縁談は、私にはすぎたお話です。姫につりあいません、私では。」

すると、王妃はくすつと笑って、夫に言った。

「あれが忘れられない？・・・そうね、あなたも年をとったということかしら。たしかあそこは今年・・・」

私は目の前の会話から突然締め出され、彼らがなにを言っているか理解できずにいた。夫はわかるらしく、無表情できている。王も静かに王妃の話を聴いていたが、王妃が言葉を切ったところで夫は「そうですね。私もそれなりに大人になったんでしょう。では、私達はそろそろ・・・」

とさりげなく話を切ってしまった。そのときちょうど宰相が、彼ら自身の夜会の準備のため、王と王妃に退室をうながしに来た。その為、二人との謁見はこれで終了したのだった。王妃は去り際私に「アルベールは才能のある人間よ。妻として足を引っ張らないようにね。」と言い残し、王と共に去っていった。私はうなだれた。アルベールの縁談話は噂で知ってはいたが、いざ自分の耳で事実を聞くところにも苦しいもののかとつらくなる。しかも、私は彼にとつてのお荷物的存在でしかないとみなされるのはわかっていながら

も、いざその言葉を實際聞くとやはり傷つくものだ。そして、最後の会話・・・妻の私が知らない何かを、他人は知っている。妻扱いされていないからそれも仕方ないのだろうが・・・

私は二人が見えなくなるまで膝を折り、頭を垂れていた。しばらくすると夫から「行くぞ。」と声をかけられ、私は我に返って夫の後を追ったのだった。

7 夫とある女性のこと

王の間から伸びる放射上の回廊の一つを南西に抜けると、美しい広大な庭が見える客間にたどりついた。そこにはたくさんの人だかりができている。男性はタキシード姿、そして女性は色とりどりのドレス姿。華やかな空間がそこにあった。私は夫より二・三步後から、彼を見失わないようついていくのに必死である。それほど大勢の人間が集まっていたのだ。私は人ごみを掻き分けていっていったが、もたもたするうちに、ついに彼の背中が見えなくなってしまう。彼は歩幅も大きいし歩く速度も速かったため、私は置いていかれてしまったようだ。もちろん彼は、私を待つてはくれない（見向きもしなかった）ので、わかりきった結果ではあるが。

あたりを見回し夫の姿を探していると、ふいにオーケストラの演奏する華麗なファンファーレが鳴り響き、それと共に王と王妃が螺旋階段から降りて来た。人々は雑談をやめ、静かに王と王妃のほうに向き直り膝をついて頭を垂れた。王が人々を見渡して言った。

「皆のもの、良く集まってくれた。顔をあげよ。今回のこの宴は、我が同盟国ルーニア王家に嫁いだ娘のアデリシアが、無事第一王子を産んだ祝いの夜会だ。今宵は存分に楽しむが良い。」

すると、人々は口々に「おめでとうございます！」といいながら、拍手し立ち上がる。それは大きな波となり、やがて両手をあげて「エダル万歳！！」と叫びはじめた。王はしばらくして、満足そうに手を上げ言った。

「そのあたりでよい。さあ、皆のものの宴を始めようではないか！」

その言葉を合図に再びオーケストラ演奏が始まり、王は螺旋階段の上にある賓客席へ、王妃と側近を伴って下がった。また室内に喧騒が戻ってきた。しばらくすると、中央が広く開いて男女がダンスを始めている。演奏もいつのまにかワルツに変わっていた。私は人の合間をはいくぐって夫を探す。しかし見つからないため、休憩しようとする柱の隅に身を沈めた。侍女が飲み物をくばっていたのでもらって、一気に飲み干す。度重なる緊張で喉が相当渴いていたようだ。一息ついて、ゆっくりと室内を見渡してみる。久々に味わう雰囲気だが、王宮の宴はやはりスケールが違う。集まる人の多さもだが、華やかさや華麗さも一貴族のそれとは大違いだ、と私は思った。人が多く室内も広いので、私を見知った貴族たちが近づいてこないのもありがたかった。

ぼんやりと人々を見てみると、中央よりやや右に人がたくさん集まっている。目を凝らすと、夫とその友人知人たちが談笑しているのが見えた。彼は交流範囲も広く、容姿端麗で地位もあるためたくさんの人とつながりがある。妻として出て行き、挨拶すべきか・・・と逡巡したが、やめておいた。彼は王と王妃には義務で結婚報告をしているが、それ以外の他人には私のことをおっぴらに吹聴していない。別に隠し立てしているわけではなさそうだが・・・ただそれでも、私は彼のまとう雰囲気で、彼が私を妻として他人に認識させるのを嫌がっているように感じた。だから、自分から妻であることを名乗ることは、恐ろしくて出来ない。他人はもちろん、夫からあからさまに嫌がられるのは避けたかった・・・自分が傷つくし、一番は夫に嫌われたくなかったからだ。だから、今もこうして柱のすみっこ

で、自分とは異世界にいるようなきらびやかな集団を、ただ眺めているだけ・・・。

夫はしばらくして、彼の脇にいる女性達のほうに振り向いた。一人はピンクの胸の大きく開いた大胆なデザインのドレスを着た金髪の碧眼美女で、もう一人はグリーンの最新流行デザインドレスをき

た黒髪黒目の美少女。そして、青い髪に茶の瞳を持ち、薄いブルーのマーメイドドレスを着た美少女である。彼女らは夫に手をかけたリ、寄り添って微笑みあい、なにか楽しそうに話していた。その時、人目を引くラメの入ったばら色のドレスを着た、金髪の女性が夫に話しかけた。夫は振り向き、一言二言言葉を交わすと、その女性と中央へ連れ立って行ってしまった。脇から、周囲の会話が聞こえてくる。

「あれ、アルベール・クレイトンと・・・あいつまた愛人変えたのか。よくやるよ。まったく。」

「あの女知ってるよ。ミドー伯爵の一人娘だろ？たしか・・・フオレンティーヌ・・・だっけ？」

「週末迎えに来てんだろ？アルベールにぞつこんらしいって本当か？あいつに泣かされた子、結構いるんだよなー」

「結婚すんのか？かなり乗り気らしいじゃないか。まあ美人妻を持つにこしたことはないな。ミドーとクレイトンなら組み合わせとしてアリだろう。なにしろ、あの顔に肢体だぜ？」

「まあ、お下品よ、口を慎みなさいな。」

私はその会話を聞きながら、切ない気持ちで夫を見つめた。うすうすわかっていたことだが、週末の帰りが遅いのはやはり女性関係からだったのか・・・。夫はそのフオレンティーヌと呼ばれた女性と、ワルツを踊っている。美男美女がステップを踏み、踊る姿は華麗だ。確かに誰が見ても、文句の付けようのない組み合わせだと思っただ。しかし、そう冷静に頭で判断する自分がいる一方、私だって夫を愛している、自分のほうを向いてほしいという欲求も、夫とフ

オレンティーヌと呼ばれた女性の光景を実際目の当たりにし、抑えられないくらい高まってきていた。しかし、私にはそれだけの価値がない。身分や容姿、結婚にいたる経緯・・・どれをとっても、自信をもてるものがない。しかも私は夫に嫌われている。ただの法律上の夫婦にしかすぎないのだ。離縁されないだけでも有難く思わなくては・・・と、その欲求を心の底へ押さえ込んだ。

夫のことをもっと聞きたい、そして夫の行動を見たいと思う反面、それにより傷つくのも怖くなった私は、気分転換にそつと庭へ出た。

8 ある男性のこと（前書き）

8 ある男性のこと

庭はかぐわしい花々の香りで満たされている。私は深呼吸をして、近くの木製のベンチへ腰掛けた。暖かくて良い夕べだ。宵闇に一番星が輝いている。ぼんやりと遠くの景色を見つめていると、不意に後から声をかけられた。

「いい夕べですね。」

後を振り向くと、背の高い黒髪の青年が立っている。周囲にそっと目をやるが、彼の近くには誰もいない。私に話しかけたようだが、私は彼を知らない。しかし、無視するのは失礼なため、あいまいに笑って無難に答えた。

「そうですね。暖かい、いい季節になりました。」

彼はそれを聞くと、ふっと微笑んだ。

「ああ。警戒してます？申し訳ない。いきなり失礼でした・・・。私はウィル・オースデンと申します。貴女はアルバール・クレイトンの奥様ですね。」

そういつて彼は私の手を取り、手の甲にキスをして恭しくお辞儀した。私はどぎまぎして、居心地が悪くなる。ほとんどこのような紳士的挨拶をされたことはないからだ。せいぜい、結婚前の夫からされたぐらいで・・・。私が困っていると、彼は手を離しごく自然なすぐさで、私の隣に腰掛けた。

「いや、実は彼とはちょっとした知り合いでしてね。あんまり彼

は公にしないみたいですけど、結婚したって話をきいたものから。この機会にぜひご挨拶を、とおもいまして。」

彼はどうやら、夫と同じ宮廷内の職場にいるようであった。彼は夫と同じ年であるという。ブルーの瞳をいたずらっぽくきらめかせ、ユーモアを交えて感情豊かに職場や夫との日常の話、また他愛もない世間話をする彼は、実年齢より若く見えた。

「・・・そういえば、アルベールはどうしたのです。一緒ではないのですか？」

私はどう答えていいか迷ったが、こう答えた。

「ご友人の方とお話があるようで。私は少し休憩しておりました。」

すると彼は、難しい顔を一瞬してから、すぐに笑顔になった。

「そうですか。彼は顔が広いですからね。・・・さて、私はもうお暇させていただきましたので、これで失礼します。また、お会いすることもあるでしょう。その時には、ぜひお茶でも・・・おつとアルベールにしかられるな。人妻を誘うなってね。」

それじゃ、と軽く頭を下げて彼は去っていった。久々に人間らしい会話をして私は楽しかった。夫と愛人のことをつかの間、わすれることができた彼には、感謝もしていた。私は長いこと、彼の去っていった方向に目を向けていたようだ。すぐそばによく知った人物が近付いてきているのにも関わらず、まったく気が付いていなかったからである。

間幕 妻の表情のこと

俺は、今日あれを見て、いつもと同じく何も思わなかったはずだ。結婚していることを知っており、あれの顔もわかるフォレンティーヌには、「いつもとなんかちがうじゃない、形だけの妻に情がわいたのかしら？馬子にも衣装ね。」と笑われてしまう始末である。そういうフォレンティーヌはバラ色の大胆なデザインのドレスを身につけ、その豊満で魅力的な肉体を見せ付けるようであった。他にもよってくる女達は皆、華麗で美しかった。それなのに、俺はどこか上の空であった。考えてみれば、馬車でもたつくあれを助けてやつたり（乱暴に引つ張りあげ、下ろしたただけだが）、嫌味がなんとなく出てこなかったりと、不可解な自分の行動に首をひねるばかりだ。考えれば考えるほどいらいらしてきて、わざとあれを置き去りにして、俺は知人や女性達との話に花を咲かせていた。あれのことだから、どこからか見ていることは予想できる。思ったとおり、柱の隅にあれを見つけた。俺はわざと、近寄ってきたフォレンティーヌと中央に出てワルツを踊った。他の貴族達が、俺達が公然と愛人関係にあることについて噂しているのを、あれがきいたらどんな顔をするだろう……。まったく、他の奴らは暇である。噂するしか能がない。

「ねえ、いいの？奥様を際し置いて愛人とダンスしているって、噂されちゃうわよ？」

と、フォレンティーヌが耳元でささやいた。言葉とは裏腹に、いたずらっぽく笑っている。この状況を楽しんでいるようだ。俺は彼女の腰を引き寄せ、ささやき返す。

「ふん、お前、この状況をたのしんでいるだろう？」

すると彼女はますます笑みを深くして、意味ありげにそつとささやく。

「このあと、もっとスリリングで楽しいこと、してくれるんですよ?。」

――ダンスが終わってしばらくして、俺は人気のない小部屋にフォレンティーヌを連れ込んだ。二人でもつれあうようにして部屋になだれ込み、激しくキスをしながら俺は後ろ手にドアをしめ、鍵をかけた。薄暗い、空き部屋である。宮廷に出入りしているので、これくらいの部屋を見つけることは造作もない。

「ああつ、あん!。」

俺は彼女の後に回り込んでいた。ドレスの襟ぐりから右手を差し込み、豊かな胸を直接愛撫する。左手はドレスのすそをたくし上げ、彼女の下着の脇から指を差し入れ、茂みの奥深くに侵入しまさぐつていた。彼女の弄ばれ敏感になった肢体は、刺激をするたびに感じるのか、もうすぐ達しそうなためか、細かく震えている。まとめあげた髪は少し乱れ、紅潮した頬、潤んだ大きな瞳で振り向き様に俺を見つめるその様子が、余計扇情的に俺を煽るのだ。彼女は声を押し殺し、必死で壁の柱にしがみつく。茂みからあふれ出した愛液は下着にしつとりとしみこんでいた。俺は我慢がきかなくなり、彼女

の中に押し入ろうと彼女の中をかき回していた指を抜き、かわりに俺の下腹部をすりつけた。そしてふと、柱のそばの窓の外に目があった。ここは3階のため、小さな窓から下の庭の様子が見える。庭に備え付けの木製ベンチに、あれが座っていた。あれの表情が珍しく柔らかい。誰かと話しているようだが、陰になって相手の顔は見えないが……。俺は情事中であることを一瞬忘れてしまい、あれと話している人間の顔を見ようと、目をこらしていた。あれは……。

「……………はあつ……アル？」

彼女が甘い声で俺を呼んだ。はつとして、視線を戻す。彼女は不思議そうに、突然動きを止めた俺を見上げていた。情事の再開を促す彼女に対して、さっきの光景を見て、俺はなんだか萎えてしまった。自分の着衣を整え、彼女から離れて言った。

「今日はこれで終わりだ。」

彼女は拍子抜けしたようで、乱れたまま俺を見つめていたが、俺はかまわず外へ足を向けた。

9 ある美少女のこと

「ずいぶんと呆けているな。」

冷たい声が不意に後から聞こえた。我に返ると、夫が無表情で私を見ている。私はあわてて立ち上がり、「すみません。」と謝った。夫はじつと私を見ていたが、

「いままでどこで油をうつていたかと思えば、お前という奴は・・
。」

夫は、今まで私がどこかでふらふらしていたと思っていたようであり、その態度をなじられた。私はもう一度謝った上で、こう切り出した。「ごめんなさい。あなたがどこにいるかわからなくて。ここはとても広いから・・。」と、そこまで言ったところで夫はそれをさえぎり、

「おい、いいわけをききに來たわけではないんだが。それにしても、お前が・・意外だったな。夫に隠れて密会か？」

それを聞いて私は驚いた。夫は、先ほどウィル〃オースデンと私が話をしているところを目撃したらしい。しかし、密会なんてそんなたいそうなことではない。庭には人がほとんどいなかったとはいえ、彼はきちんと紳士的に振舞っていたし、ベンチに座ったときも、距離をとってすわっていた。だから、夫がどこから見ていたのかはわからないが、密会というものではないと言い切れるのに・・。しかしながら、夫は密会と頭から決め付けているようで、話をきられてしまい理由を説明することはかなわなかった。しかし、ウィル〃オースデンについては彼に話しておくべきだと思い、「あの、でも

一緒にいた方はあなたと同じ・・・」

そこまで言いかけたとき、明るい澄んだ声が聞こえた。

「・・・クレイトン先生？先生もきていたのね！」

私は、言葉を切って、声のした方向に振り向く。夫もつられて視線を流した。そこには、プラチナブロンドの美しい長い髪に董色の澄んだ瞳をもった美少女が立っている。年は16か17くらいであろうか。瞳と同じ董色のドレスのすそを持ち上げ、小走りにこちらへやってきた。そして、夫の腕にしがみつく。どうやら察するに、夫の職場の生徒らしい。どこかの貴族令嬢だろうか。夫は軽く目を見開いて、彼女を受け止める。

「シルレーネ、いきなりそういうことをするなと言っているだろう？淑女として恥ずかしくないのか？父上にしかられるぞ。」

夫はいつになく優しく彼女を見つめ、そっと彼女の腕をはずした。シルレーネと呼ばれた少女は、頬を膨らませて夫に抗議した。

「でもお父様は、先生のこと知ってるし大丈夫よ。今日来るなら言ってくれたらいいのに・・・。ね、先生一緒に踊りましょうよ。私、ずっと先生を探していたんだから。」

すると夫は苦笑いしてこう言った。

「プライベートのことをわざわざ生徒に報告はしない。さあ、そろそろ子供は寝る時間だ。帰らなくていいのか？父上の元を勝手に離れてきたんだろう？」

シルレーネは、そっぽを向いて「私、子供じゃないわ！」と反論した。そしてふとこちらに視線を向け、次の瞬間、董色の瞳を大きく見開いた。

「あら???・・・もしかして、こちらの方は・・・」

そして私に向き直り、手をポン、とたたいて笑顔になった。

「やっぱり！先生結婚したって本当だったのね！お父様から噂できいてはいたけど、先生もてるから、本当かしらって、思っていたの。この間も、バルバラやりサと話してたのよね。」

若い娘特有のいきいきした表情と、話振りに終始苦笑いをしている夫。でもその目はいつもと違う。私でもなく、愛人や他の女性を見るときのものでもなく・・・温かい愛情に満ちた目だ。彼女が、本当にただの生徒なのだろうか、疑ってしまうほどに。愛人、という俗っぽい言葉ではなく、むしろ恋人に向けるような、純粹な視線。私はつい先刻の、ホールでのフォレンティーヌと夫の逢瀬の時に感じた、暗いどろどろとした嫉妬ではなく、この二人を前にしては物悲しい気持ちを感じた。あきらめの境地、というべきかもしれないが・・・この湧き出る感情に、なんと名前をつけたらいいかわからない。複雑な心境で二人を眺めていた。すると、シルレーネが私の手をとって挨拶した。

「はじめまして。私はシルレーネ・ベルティナ。先生にはいろいろ教えていただいてます。先生の奥様ってどんな方かしらって思っていたけど、先生の周りにいままでいなかった感じの方なんですね！」

夫に学んでいる、ということから貴族令嬢ということであろうが、

ベルティーナ家について私はほとんど知らなかった。私は物怖じしない彼女に少々面喰らいながらも、取られた手を優しく握り返し、恐る恐る（夫もいるので）慎重に挨拶をし、笑顔を返した。

「こちらこそ、お会いできてうれしいです。はじめまして。私はオリエと申します。」

すると、シルレーネは花が咲いたように満面の笑みを浮かべて、夫に向き直りこう言った。

「先生、感じのいい方ね。優しくしてあげないとだめですよ！」

夫がその言葉を言われた時、一瞬渋い表情を見せた。私はその瞬間を見逃さなかった。

10 少女が去った後のこと

シルレーネはそれからしばらく、その場で夫と他愛のない話題を話していた。私はそばで静かに話を聞く。すると彼女は私にも笑顔でこう話しかけた。

「先生って、家ではどんな感じなのですか？」

私は会話を聞いていた、といつてもどこか上の空だったらしく、突然話を振られて慌てた。しどろもどろに「・・・そうですね・・・これといつては・・・」と答えようとすると、夫が遮った。

「シルレーネ、本当にもどらなくていいのか？私達も、そろそろ疲れたから帰るつもりなのだが。」

シルレーネが答えようとしたその時、2人の侍女らしき服装をした女性が近づいてくる。

「シルレーネ様！！こちらにいらっしゃったんですね。」

「旦那様が心配されておいですよ、すぐお戻りください。」

シルレーネはそれをみると、舌をぺろつとだして茶目っ気たっぷりに笑った。そして私と夫に別れの挨拶をし、手を振りながら、侍女と共に去っていった。

少女が去り、あたりはまた静かになった。遠くに宴の喧騒が聞こえてくる。が、城内入り口の方も少しずつ人の話し声が聞こえてく

ることから、帰宅する人間もちらほらいるようだ。夫は私の方を振り返ると、言った。

「話の腰を折られたな。帰るぞ。」

夫は静かにそう言うと、私に背を向けて歩き出した。私も慌ててその後を追った。

「・・・なんで・・・」

一方その頃、3階の一室、先ほどまでアルベールと逢瀬を交わしていたフォレンティーヌ又は、情事の名残を色濃く残したまま、近くのソファにけだるそうにして寄りかかっていた。髪は乱れ、衣服は乱れたままだ。彼女は髪をかきあげた。

？アルは、なんだか様子がおかしかった。いつもなら、このまま私を抱いていたはずなのに・・・最近ずっとそう。ぼんやりして私に集中してないじゃないの！まさかとは思うけど・・・？

そこまで考えて、むしゃくしゃした彼女は鼻を鳴らした。すると、入り口付近で男の声がする。

「いけないな、ミドー家の令嬢ともあろう人間が。」

フォレンティーヌは驚いて息を潜める。鍵はかけてあるから入り込

まれる心配はないが、用心して男の気配をつかがった。ドアの外で、男の声がまた聞こえる。

「今さら無駄だ、いないふりしても。さっきまで、クレイトン家の次男坊といいこととしていたんだろう？ 楽しめたか？ 想像に易いぞ、お前の今の姿は・・・」

と、男はいったん言葉を切った。舌なめずりをする音が聞こえる。どうもフォレンティーヌとアルベールの情事を知られているようだ。これ見よがしにダンスをしていたし、愛人関係の噂も飛びかっていたので、誰かにその場面をおさえられてもしかたないのだが。しかし、この男はなんだか気味が悪い。フォレンティーヌは答えずにそのまま男の言葉を聴いていた。

「だがな・・・お前、あの男の真意がわかっているのか？ 大方遊ばれて捨てられるのがおちだぞ。」

それは彼女もわかっている。最初からビジネスと体の関係と割り切っているのだから。・・・わかっているはずだ。彼女は自分にいきかせるように心の中でつぶやく。男は続けた。

「あの男の心がどこにあるか、知りたいのではないか？ だんだん自分でない誰かの・・・そう、例えばお前より遥かに劣るあの女のもとに注がれた視線が・・・気になるのではないか？ そして・・・」

するとフォレンティーヌは、思わず立ち上がって男の声にくっついていった。

「無礼者！ なにを根拠のない勝手な妄想を・・・！！」

叫んだとたん、彼女ははっ、として口をつぐんだ。これでは男の思
う壺ではないのか。

案の定、男は低くしのび笑いをして言った。

「くく・・・まあいいだろう。どうだ？俺も協力してやっていい
のだぞ？あの男に本気になったのならな・・・ただし、ただとはい
えぬがな。」

彼女は息を吞んだ。何を言い出すのだろう、この男は？

「わかっているだろう？お前なら俺をどう喜ばせることが
出来るか。」

11 家路のこと

夫と私は、外に待たせていた馬車に乗り込んだ。城内入り口には帰る人で混雑している。夫は、私がついて後に馬車へ乗る人の列が悶える事を気にしてか、今回は私を先に馬車内へ押し上げ、その後自分もさつと乗り込んだ。馬車が走り出した。馬車内は行きと同じく静かだった。しばらくして夫が、

「お前がどこぞの誰かと密会とは……。いいご身分だったな。」

と抑揚のない声で言った。私は先ほどの話を蒸し返していると思った。話を切り上げたのは自分なのに、どうしてこんなことを言うのだろう？ しかも私は密会なんてしていない。自分だって、愛人とダンスを公然としていたではないか。しかも、仮にも妻である私の前で。その前に、王達との謁見後に私をおいてさっさとどこかへ行ってしまったのは、自分ではないか。

私は口まで出かかった言葉を必死で押さえた。でも、ここだけははっきりさせておきたかったので、一言夫へ言った。

「私は密会なんてしてません。」

夫は青い瞳を細め、せせら嗤った。

「ではなんだ？ 冷たい夫より、優しい男にほだされたのだろうか？」

「そんなこと……。」

確かにウィルの優しさに心引かれたのは事実だが、私はアルベールの妻だ。彼は、簡単に私が不貞を働くと思っっているのだろうか？ ウ

イルだつて、人妻に手を出そうとはしないだろう（ましてや私だし）。社交辞令で話しかけたに過ぎないのに。なぜ、こうもなじられなくてはならないのだろう？

夫は沈黙した私を眺めていた。やがて、うつむいた私の頬に彼の指先が触れた。私はひどく驚いて、はじかれたように顔を上げる。彼がこんな風に私に触れたのは、結婚してほとんどない。どういう風の吹き回しだろう？いぶかしげに彼を見つめた。彼の美しい容貌には、先ほどのように意地悪い表情はなかった。最近よく見かける無表情で私を見ている。青い瞳には私の姿が浮かんでおり、私は夫の青い瞳に吸い込まれるように視線を合わせた。彼はそのまま言った。

「深入りはするな。」

彼はそう一言つぶやくと、私に興味がなくなったのか頬から手を離し、また窓の外に視線をむけてしまった。彼の言葉は何に対してかはわからない。しかし、ウィルに対してであろうことは、うすうすわかった。彼の発した言葉には、私に対して絶対的拘束力はないように思えた。もしだめなことなら、禁止令をだせばいいだけであり、彼がこのような言い方するのは珍しいことであつた。面倒事にならないければ勝手にしろ、ということであろうか？彼の真意は、表情からはやはり読み取れない。彼は、家につくまで一言も話そうとしなかった。

12 家でのこと

私達はそのまま会話もなく、静かに自宅へ戻った。玄関先で夫のコートと上着を預かる。夫は束ねていた髪をとき、タイを緩めた。そして美しい金髪を無造作にかき上げながら書斎へと入っていった。私も羽織っていた薄手のコートを脱ぎ、続いて家へ入った。

部屋着に着替え、衣服の整理と残った家事や雑務を済ませる。それからお茶を入れた。私は、ティーポットとカップを乗せたトレイをもって、夫のいる2階の書斎へと上がっていった。書斎の扉の前に立ち、控えめに3回ノックして、お茶を持ってきたことを告げる。・・・が、中からは返事がない。もう一度強めにノックするが、やはり応答はなかった。仕方なく、扉の前から去ろうとすると、かすかなうめき声が聞こえた。私は一瞬迷ったが、急病ではないかと不安になり「失礼します。」と言って、書斎のドアを開けた。そして、夫が座っているソファへと近づいた。

私がトレイを置いたサイドテーブルには、ウイスキーのボトルと飲みかけのウイスキーが入ったグラスが置いてある。寝酒をしたのである。ソファの上で夫は眠っていた。しかし、その表情は苦しそうだ。手は何かを求めるように伸ばされている。いったいどんな悪夢をみているのか？私は思わず両手を伸ばし、彼の手を優しく包んだ。すると彼は、ふっと安堵したように表情が和らぎ、薄く目を開いた。焦点があっていない。そして彼は私の方を見てつぶやいた。

「ああ・・・貴女か・・・会いたかった・・・」

私はそれを聞いて、私でない誰かの・・・夢をみているのを悟った。この夫の夢にまで出てきて、会いたい、と思わせるのは誰だろう？フォレンティーヌか、シルレーネか、はたまた私のまだ見知らぬ女性なのか・・・そう考えて、私は苦しくなった。本当に彼が求

める人は、夢にまで見る女性で私ではないのだ・・・。

夫はつぶやいたあと、またすぐ目を閉じて眠ってしまった。しかし、もうその表情から苦しさは消えてうせている。私はそつと手を離し、毛布を持ってきて夫の体にそつとかけた。そして書斎の明かりを消し、トレーをもって部屋を出て、静かに書斎の扉を閉めた。

間幕 それぞれの秘密のこと

暗い小さな屋敷のとある一室。二人の人影が闇の中でうごめいている。一人は男で、闇の中顔はかくされており、見えない。もう一人は女で、床に膝を突いている。乱れた衣服の中から艶かしい肉体が顔をのぞかせ、男の目を楽しませていた。男はゆったりとソファに座りワイングラスを傾け、女に向かって言った。

「お前の愛する男は、なにを欲しているか、考えたことはあるか？」

女は答えることは出来なかった。なぜなら、男の膝の間に座り、彼のものを口いっばいにほおばっていたからだ。そして、彼女が口を離して言葉をつむごうとすると、男の足先が彼女の内股に割って入り、大切な部分を下着の上から乱暴に擦った。そしてグラスを持つてないほうの手で、彼女の左胸鷺掴みにし乳首を摘み上げた。

「口が留守になっっているぞ。」

女は涙目になり、くぐもったうめき声を上げる。そしてまた男のものを喉の奥深くまで口にくわえなおし、舌で愛撫しだした。彼は気持ちよさそうに目を細め、言葉が続ける。

「それがわかれば、あの男はお前のものになるだろう。・・・なぜ手をかすか聞きたそうだな？」

女はかすかにうなずいた。しかし、男はニヤリと嗤っただけで答えなかった。かわりに、グラスを置いて、女の奉仕をやめさせ両膝に手を差し込み、いきなり抱え上げた。両足を大きく割り開いた状態

で自分の股間の上に導き、女の腰を下ろした。そしてすぐにリズムカルに動き始める。女はとたんに嬌声を上げ始めた。男は器用に腰を動かしながらワインに口をつけ、煙草に火をつけた。

「そうだな・・・今晚満足させられたら、答えてやってもいい。」

王宮から帰宅したアルベールは、書斎に入ってウイスキーを傾けていた。しばらくすると眠気が襲ってきてそのままソファに倒れこむ。彼は夢の中で、見えない灰色の霧に覆われていた。前も後ろも見えない。周囲に人はなく、一人その中で彷徨っているのだ。行けども行けども、先は見えない。心なしか空気も薄くなっているようだ。息がとてもしにくい。苦しくて、目を瞑りその場に倒れてしまう。周りは暗くなり、意識もぼんやりとする。やっとのことで、うつすら目を開く。もがいて手をのばした先に、人がいるのがわかった。伸ばされた手は、温かくなり何か柔らかいものに包まれているようである。必死で閉じそうな目を開けると、そこには董色のドレスを着た人がそばにいるのがわかった。その人は・・・

「ああ・・・貴女か・・・会いたかった。」

彼はそれだけつぶやくと、また意識が閉ざされてしまったのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1692z/>

すみっこのわたし

2011年12月31日21時46分発行